

はだの歴史博物館 令和5年度 企画展

戦争と人びとの生活

～戦いは戦地だけではない～

令和6年2月1日(木)～4月14日(日)



応召兵士を見送る（昭和11（1936）年 大秦野駅付近）

はじめに

日本は今でこそ憲法で戦争放棄をうたっていますが、かつてアジア・太平洋で15年にわたる戦争を起こし、自国、他国に大きな死傷者を出した過去があります。その戦いのかたわら、直接現地での戦争には赴かない人々も戦いを強いられていました。それは個人主義、自由主義を犠牲にし、全てを戦争に注力するようという国家

的な圧力でした。

敗戦から80年近くが過ぎようとしている現在、かつての戦争を知る方は年々少なくなっているのが実情です。

現在各地で紛争が起きており、その影響は各国に及んでいます。このような時だからこそ、かつての戦争の時代を振り返り、改めて平和の尊さを考えてみたいと思います。

恐慌と経済更正運動

関東大震災以降の社会的混乱に加えて、昭和初期の金融恐慌、昭和5（1930）年の昭和恐慌により農作物価格は下落します。労働争議は多発し、失業者は町にあふれ、社会不安が一層深刻化していくなか、昭和7（1932）年、農林省による政策、「農山漁村経済更生運動」が全国的に展開されます。

神奈川県では「国民更生運動実施計画要綱」を定めますが、その要目として掲げられたのは以下の4つです。

- 一、建国の大義に則り挙国一致国難打開に協力邁進せしむること
- 二、自力更生の気風を振作すること
- 三、経済の組織化、計画化を図り之が実行を期せしむること
- 四、国民各自をして其の分に応じ社会公共に奉仕せしむること

この政策は、「挙国一致」という言葉が端的に示すように、農村の末端まで組織的に取り込んでゆくことで、後の国家総動員法につながるものと考えられます。

満州事変

昭和6（1931）年9月18日、奉天（現在の遼寧省瀋陽）郊外の柳条湖で日本軍の謀略が企てられ、南満州鉄道の線路が爆破される事件が起きます。日本軍はこれを中国東北軍の破壊工

作だとして日中両軍が衝突、当時の政党内閣は不拡大政策を採択しましたが、日本軍は独断専行で部隊を次々に投入し、わずか半年の間に満州を制圧、昭和7（1932）年3月1日、日本の傀儡（かいらい）国家である「満州国」が建国されます。



「満州国・関東州」地図

孤立化する日本

昭和8（1933）年2月24日の国際連盟総会では、中国の統治権を承認し、日本軍の満州撤退を求める報告案が示されました。結果は、賛成42、反対1、棄権1で、「満州国」は国際的に認められませんでした。反対票を投じた松岡洋右ほか日本代表団は議場から退場。日本は、3月27日に国際連盟脱

退に関する詔書を発表すると共に、連盟に脱退を通告し、国際的に孤立していくこととなります。

日中戦争

昭和 12 (1937) 年 7 月 7 日北京郊外の盧溝橋で夜間演習をしていた日本軍に中国軍が発砲したことが発端となり、日中戦争が勃発しました。

当時は「北支事変」や「支那事変」などとも呼ばれていましたが、この戦争は泥沼化し、太平洋戦争に拡大していきます。戦争を継続するため、総力戦に耐えられるような動員体制をつくらなければならず、翌年に国家総動員法が制定されます。以後、この法に基づく勅令が次々と出され、戦時動員体制・統制経済体制が実体化していきます。

戦時国債

戦争は一度始まるといつ終結するか予測がつかず、長引けば長引くほど急に軍費が必要になる局面が増えてきます。そこで増税だけでは対処できない場合に行われたのが戦時国債の発行でした。

日本ではすでに日清戦争の際に国債が発行されていますが、昭和 6 (1931) 年から昭和 20 (1945) 年まで続いた「十五年戦争」では、安易に戦時国債が乱発されました。

昭和 17 (1942) 年 6 月に郵便局から発売された「戦時郵便貯金切手」は、

切手という名称ですが「割増金付き郵便貯金の債券」でした。戦費となることや、よく当たるという含みから「弾丸切手」の愛称で広く宣伝され、キングレコードから「弾丸切手命中」と題した曲も発表されています。額面は 2 円で、隣組などで半ば強制的に購入させられたといえます。

戦争終結後、人びとが「貯蓄」のつもりで購入した戦時国債は、極度のインフレにより紙くず同然となりました。



「弾丸切手」(戦時郵便貯金切手)

代用品と供出

日中戦争が拡大し収拾困難となっていた昭和 13 (1938) 年 4 月 1 日、政府は国家総動員法を公布します。これにより経済統制は強化され、金属や繊維製品、革製品は軍需優先となります。こうした製品の民間消費には代用品が用いられ、金属等の代用品として陶製のものが生産されるようになりました。

平成 3 (1991) 年の秦野駅南部地区区画整理事業に伴う太岳院遺跡発掘調査では、地下式の防空壕が検出されており、陶器製代用品の水筒、おろし金、ミンチハンマー、サイコロが出土しています。



太岳院遺跡 91-1 地点出土陶器製代用品

戦争末期には硬貨さえ陶器製の代用品が試作されましたが、実際に使用する前に終戦を迎えました。

「国家総動員法」では、不要不急の金属回収も奨励され、隣組や国防婦人会を通じて家庭内の金属回収が始まりました。当初は任意でしたが、昭和16(1941)年7月に「金属類回収令」が出されると半強制的な回収となり、翌年5月には金属回収令による強制譲渡命令が公布されます。

北秦野村の資料として、「翼賛壮年団金属回収協力委員」と書かれた腕章が遺されています。赤い布地の服の再利用で製作されたようです。

応召と戦死

何よりも人々に多大な影響を与えたのは「応召」により人手が奪われる事です。農家の主な働き手がいなくなるわけですから、奥さんは小さな子供を何人も抱えて農作業を行わなけれ

ばなりません。

やがて戦争が激化すると、応召した兵士は「英霊」と呼ばれ、無言の帰国をするケースが多くなっていきました。骨壺には名前を書かれた紙が入っているだけだったとの話もよく聞かれます。



町葬の様子（昭和18(1943)年）

おわりに

戦争は悲惨で愚かなものであることは、実際に参戦した人々や銃後を守って統制された生活を送った人々にも最初から分かっていたことでしょう。しかしながら、情報操作や世論などによって戦争は昭和20(1945)年8月にまで及びました。

多くの犠牲を払った過去の教訓に今こそ学ぶべきではないでしょうか。

発行 令和6年2月1日

編集 〒259-1304 神奈川県秦野市堀山下 380-3

はだの歴史博物館 Tel. 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794